

中国の文化Ⅲ

# 日中文化交流史

第四回 遣唐使の時代



隋煬帝(唐閻立本歷代帝王図卷)

高校では、隋の煬帝が倭からの国書に気分を害したのは、中国のことを「日没するところ」と書いたからだと習いましたが・・・



伝聖徳太子二王子像(皇室御物)

## 第二次遣隋使

大業三年(六〇七年)、その王・多利思比孤が、使いを遣わして朝貢した。使者は言った。

「海の西の菩薩天子が仏法を再興されたと聞きましたので、朝貢の使節を遣わすとともに、僧侶数十人を同行させ、仏法を学ばせたいと思ひます。」

隋書卷八一 東夷伝倭国

暖草木冬青土地膏腴水多陸少以小環挂脚項令入水捕魚日得百餘頭俗無盤俎藉以櫛葉食用手舖之性質直有雅風女多男少婚嫁不取同姓男女相悅者卽爲婚婦入夫家必先跨犬乃與夫相見婦人不姪妬死者歛以棺槨親賓就屍歌舞妻子兄弟以白布製服貴人三年殯於外庶人卜日而瘞及瘞置屍船上陸地牽之或以小輦有阿蘇山其石無故火起接天者俗以爲異因行禱祭有如意寶珠其色青大如雞卵夜則有光云魚眼精也新羅百濟皆以倭爲大國多珍物並敬仰之恒通使往來大業三年其王多利思比孤遣使朝貢使者曰聞海西菩薩天子重興佛法故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法其國書曰日出處天子致

隋書卷八一

十一

書日沒處天子無恙云云帝覽之不悅謂鴻臚卿曰蠻夷書有無禮者勿復以聞明年上遣文林郎斐清使於倭國度百濟行至竹島南望舩羅國經都斯麻國回在大海中又東至一支國又至竹斯國又東至秦王國其人同於華夏以爲夷洲疑不能明也又經十餘國達於海岸自竹斯國以東皆附庸於倭倭王遣小德阿鞞臺從數百人設儀仗鳴鼓角來迎後十日又遣大禮哥多毗從二百餘騎郊勞旣至彼都其王與清相見大悅曰我聞海西有大隋禮義之國故遣朝貢我夷人僻在海隅不聞禮義是以稽留境內不卽相見今故清道飾館以待大使冀聞大國惟新之化清答曰皇帝德並二儀澤流四海以王慕化故遣行人來此宣諭旣而引清就館其後清遣人謂其王曰朝命旣達請卽戒塗於是設宴享以遣清復令使者隨清來貢方物此後遂絕

## 第二次遣隋使

その国書には、こう書かれていた。

「日出ずるところの天子が日没するところの天子に国書を送ります。つがなくお過ごしでしょうか……」

煬帝はこれ読むと気分を害し、鴻臚卿（外交担当の大臣）に「野蛮人の国書には無礼なところがある。もう報告する必要はない」と言った。

暖草木冬青土地膏腴水多陸少以隋書卷八一東夷伝倭国

日得百餘頭俗無盤俎藉以榭葉食用手舖之性質直有雅風女多男少婚嫁不取同姓男女相悅者卽爲婚婦入夫家必先跨犬乃與夫相見婦人不姪妬死者歛以棺槨親賓就屍歌舞妻子兄弟以白布製服貴人三年殯於外庶人卜日而瘞及瘞置屍船上陸地牽之或以小輦有阿蘇山其石無故火起接天者俗以爲異因行禱祭有如意寶珠其色青大如雞卵夜則有光云魚眼精也新羅百濟皆以倭爲大國多珍物並敬仰之恒通使往來大業三年其王多利思北孤遣使朝貢使者曰聞海西菩薩天子重興佛法故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法其國書曰日出處天子致

隋書卷八一

十一

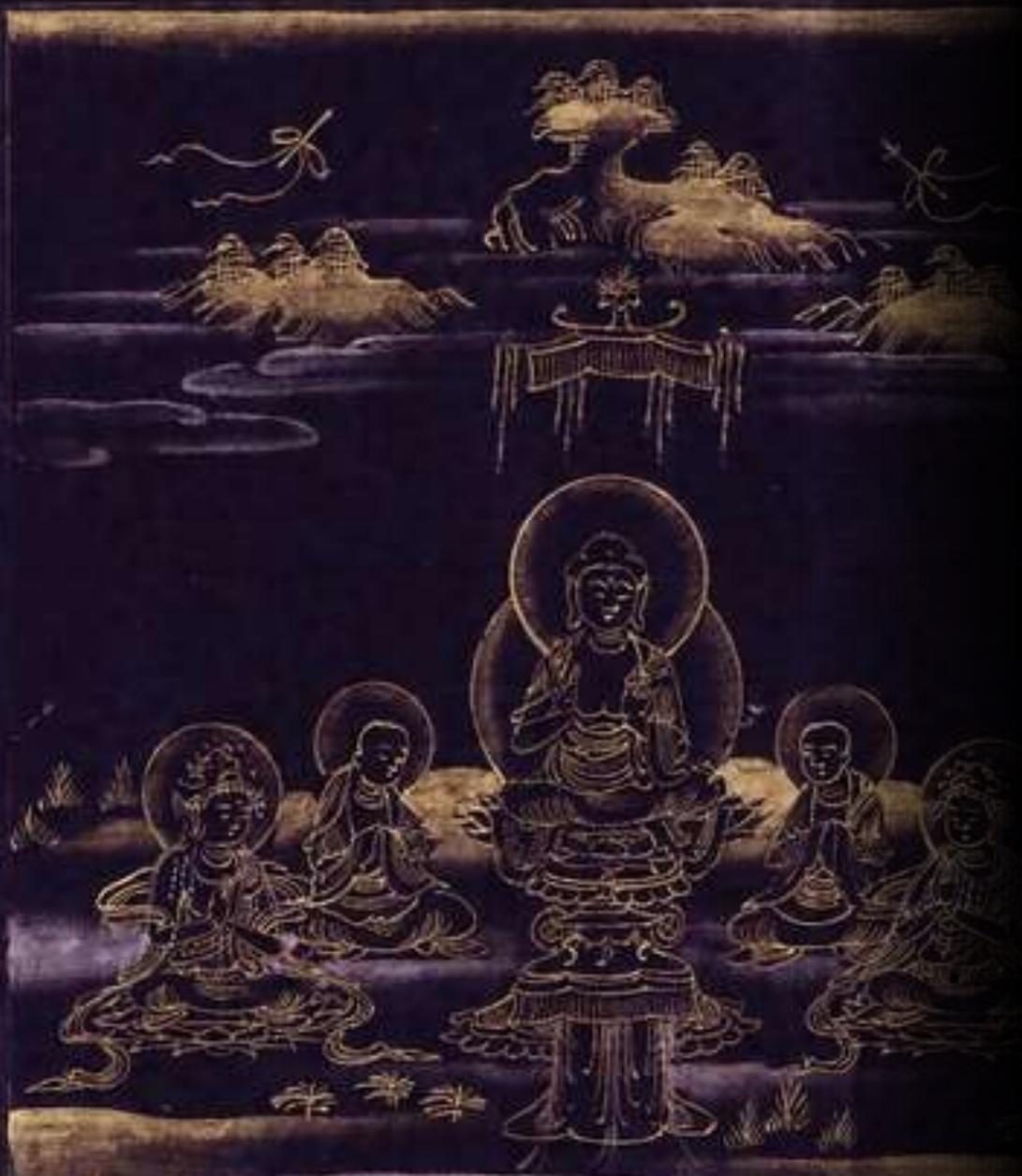
書日没處天子無恙云云帝覽之不悅謂鴻臚卿曰蠻夷書有無禮者勿復以聞明年上遣文林郎斐清使於倭國度百濟行至竹島南望舩羅國經都斯麻國回在大海中又東至一支國又至竹斯國又東至秦王國其人同於華夏以爲夷洲疑不能明也又經十餘國達於海岸自竹斯國以東皆附庸於倭倭王遣小德阿鞞臺從數百人設儀仗鳴鼓角來迎後十日又遣大禮哥多毗從二百餘騎郊勞既至彼都其王與清相見大悅曰我聞海西有大隋禮義之國故遣朝貢我夷人僻在海隅不聞禮義是以稽留境內不卽相見今故清道飾館以待大使冀聞大國惟新之化清答曰皇帝德並二儀澤流四海以王慕化故遣行人來此宣諭既而引清就館其後清遣人謂其王曰朝命既達請卽戒塗於是設宴享以遣清復令使者隨清來貢方物此後遂絕



「日没之處」は仏教經典の中の言葉

「日出處是東方、日沒處是西方、日行處是南方、日不行處是北方。」

『大智度論』卷第十



大智度論釋初品中舍利弗目犍第十三

十一

告舍利弗問曰般若波羅蜜是菩薩摩訶薩

法佛何以故告舍利弗而不告菩薩答曰舍

利弗於一切弟子中智慧寂第一如佛偈說

一切衆生智唯除佛世尊欲比舍利弗智慧及多聞

於十六分中猶尚不及一

厩戸皇子(聖徳太子)の時代、倭には中国や朝鮮半島からの多くの渡来人が来たというが、その子孫だとわかる人はいまも日本にいるのか？

① いる

② いない





新興途上国の倭を支えた渡来人たち

六世紀以前の倭は、南朝梁の「職貢図」に描かれたように、東アジアの一新興途上国に過ぎなかった。

その倭の発展を支えたのが、大陸や朝鮮半島から渡来した人々が伝えた先進的な文化や技術であった。

西域花出石乳駒馬列有... 南朝梁書... 職貢圖... 倭國... 百濟國使... 倭國使

百濟國使



南朝梁「職貢圖」(北宋写本 中国歴史博物館蔵)

## 東アジア大統一の時代

### 〔解説〕

六世紀の末から七世紀にかけて、東アジアは大統一の時代を迎える。

大陸では、約四〇〇年に及んだ分裂の時代に終止符が打たれ、中国全土を統一した巨大帝国が誕生する。隋である。

0	後漢 25-220		
100			
200	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
300	晉 265-316		
400	五胡十六国時代	東晉 317-420	
500	北朝 439-589	南朝 420-589	
600	隋 581-619		
700			
800	唐 618-907		
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700			
1800	清 1616-1912		
1900			
2000	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和國 1949-		



0	後漢 25-220	
100		
200	魏 220-265	蜀 221-263
300	晉 265-316	
400	五胡十六国時代	東晉 317-420
500	北朝 439-589	南朝 420-589
600	隋 581-619	
700		
800	唐 618-907	
900	五代十国 907-960	
1000	遼	北宋 960-1127
1100		
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279
1300	元 1271-1368	
1400		
1500	明 1368-1644	
1600		
1700		
1800	清 1616-1912	
1900	中華民國 1912-1949	
2000	中華人民共和國 1949-	



## 前回の復習

### 東アジア大統一の時代

#### 〔解説〕

隋は東アジアに新たな国際秩序を築くため、高句麗への遠征を始める。

超大国・隋の誕生により東アジアの国際情勢に緊張が高まる中、倭は第一回遣隋使を派遣する。

しかし、隋からその後進性を指摘された倭は、朝鮮半島からの渡来僧をブレインとして、冠位十二階や憲法十七条などの制度改革を行う。

制度改革によって「近代化」を實現した倭は、第二回遣隋使を派遣し、自主独立の平和外交を通じて、隋との間に対等な国家関係を樹立する。

## 〔解説〕

一方、隋は高句麗遠征の失敗や大運河の建設によって人々の支持を失い、建国からわずか三十年ほどで滅亡してしまった。

隋に代わって唐が建国すると、倭は引き続き使節を送り、自主独立の平和外交を続けるとともに、大陸の先進的な文化の導入に努めた。

0	後漢 25-220		
100			
200	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
300	晉 265-316		
400	五胡十六国時代	東晉 317-420	
500	北朝 439-589	南朝 420-589	
600	隋 581-619		
700	唐 618-907		
800			
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700			
1800	清 1616-1912		
1900	中華民國 1912-1949		
2000	中華人民共和國 1949-		



後漢 25-220

魏 220-265 | 蜀 221-263 | 吳 222-280

晉 265-316

五胡十六国時代 | 東晉 317-420

北朝 439-589 | 南朝 420-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼 | 北宋 960-1127

金 1115-1234 | 南宋 1127-1279

元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民國 1912-1949

中華人民共和國 1949-



## 〔解説〕

唐は東アジアに新たな国際秩序を築くため、朝鮮半島の新羅と手を結んで百済を滅亡させる。

唐の軍事的脅威に危機感を抱いた倭は、それまでの平和外交を捨て、六六三年、朝鮮半島に出兵する。日本古代史上最大の海外派兵となった白村江の戦いである。

後漢 25-220

魏 220-265 | 蜀 221-263 | 吳 222-280

晉 265-316

五胡十六国時代 | 東晉 317-420

北朝 439-589 | 南朝 420-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼 | 北宋 960-1127

金 1115-1234 | 南宋 1127-1279

元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民國 1912-1949  
中華人民共和國 1949-



唐の水軍

白村江の戦い 新羅の軍

663年

倭の水軍



## 東アジア大統一の時代

### 〔解説〕

白村江の戦いで、倭は唐・新羅連合軍に大敗を喫する。

その五年後、高句麗も唐に滅ぼされ、朝鮮半島は新羅によって統一された。



高麗神社

日本に渡来した高句麗の遺民たち

〔解説〕

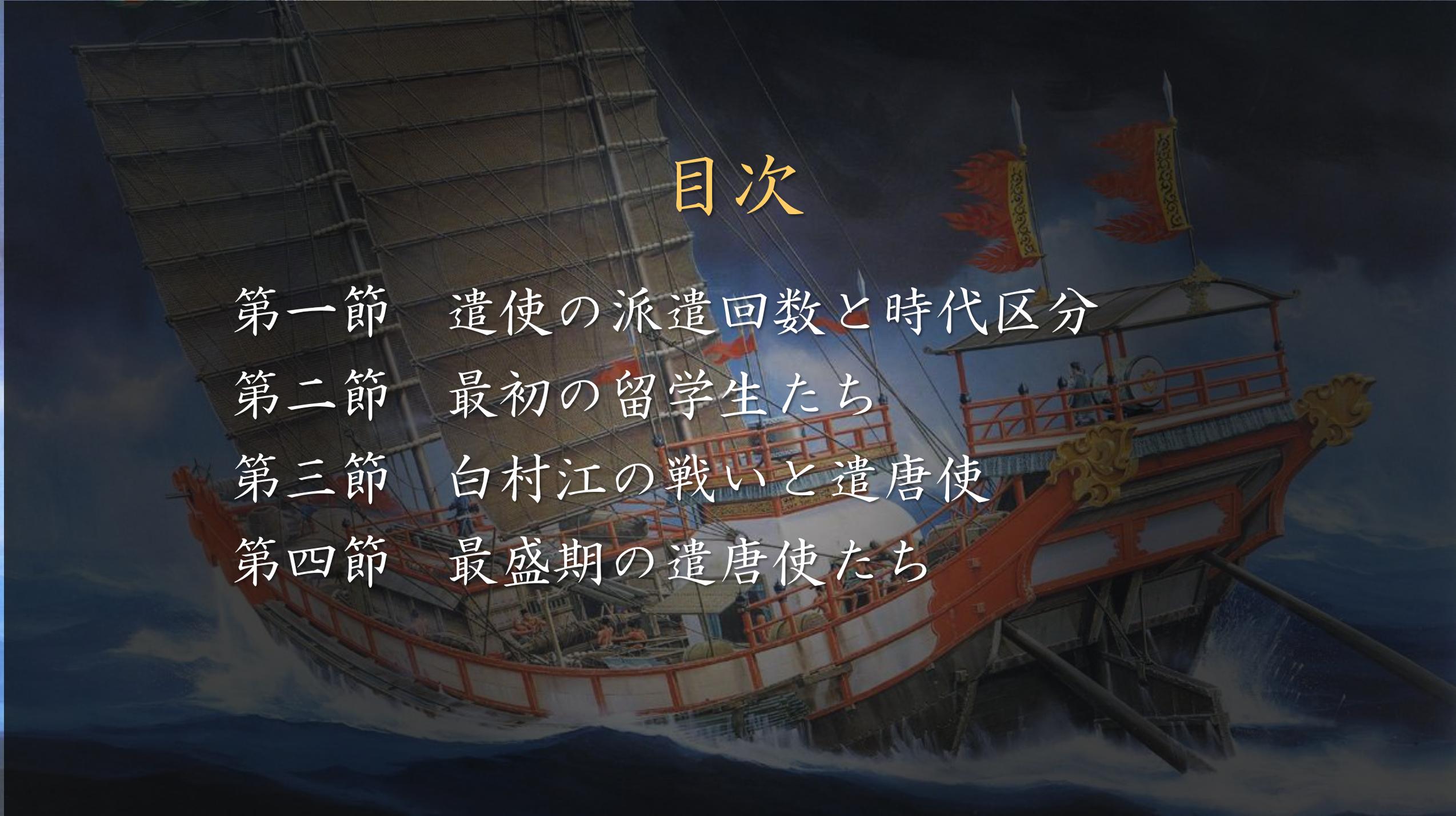
百済や高句麗が滅亡した後、その遺民の一部は日本列島に渡来した。

七一六年、朝廷は現在の埼玉県日高市・飯能市一帯に一七九九人の高句麗人を移住させ、高麗郡を設置した。日高市にある高麗神社には、高句麗の王族とされる高麗王(こまのこにしき)若光が祭られている。

## 東アジア大統一の時代

### 〔解説〕

戦いに敗れた倭は、唐との外交関係が三十年以上も中断する中、国内でさらなる制度改革を進め、国号も「日本」と改めて、再び唐との平和外交を開始する。



# 目次

- 第一節 遣使の派遣回数と時代区分
- 第二節 最初の留学生たち
- 第三節 白村江の戦いと遣唐使
- 第四節 最盛期の遣唐使たち

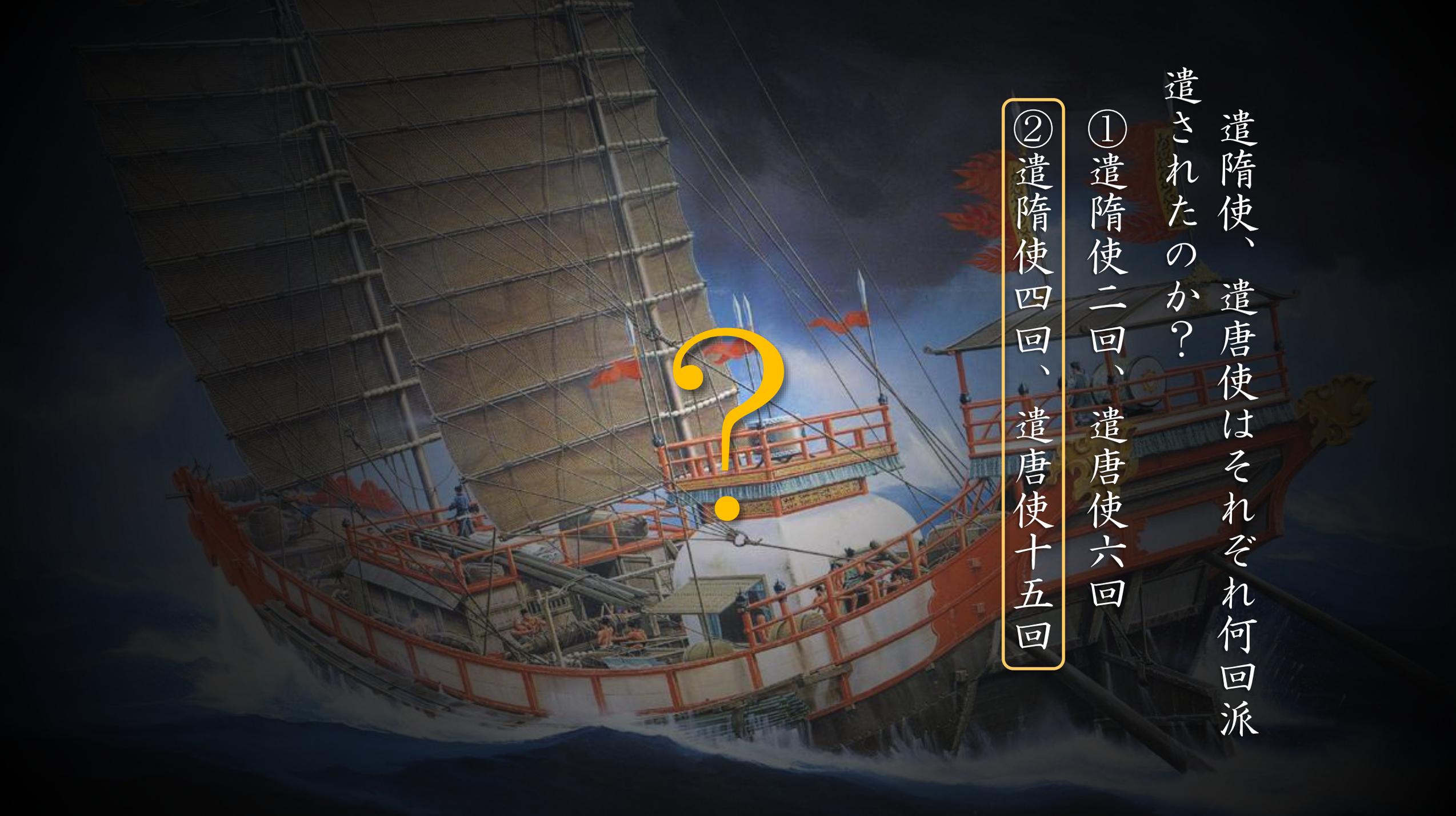


# 第一節 遣使の派遣回数と時代区分

遣隋使、遣唐使はそれぞれ何回派遣されたのか？

① 遣隋使二回、遣唐使六回

② 遣隋使四回、遣唐使十五回

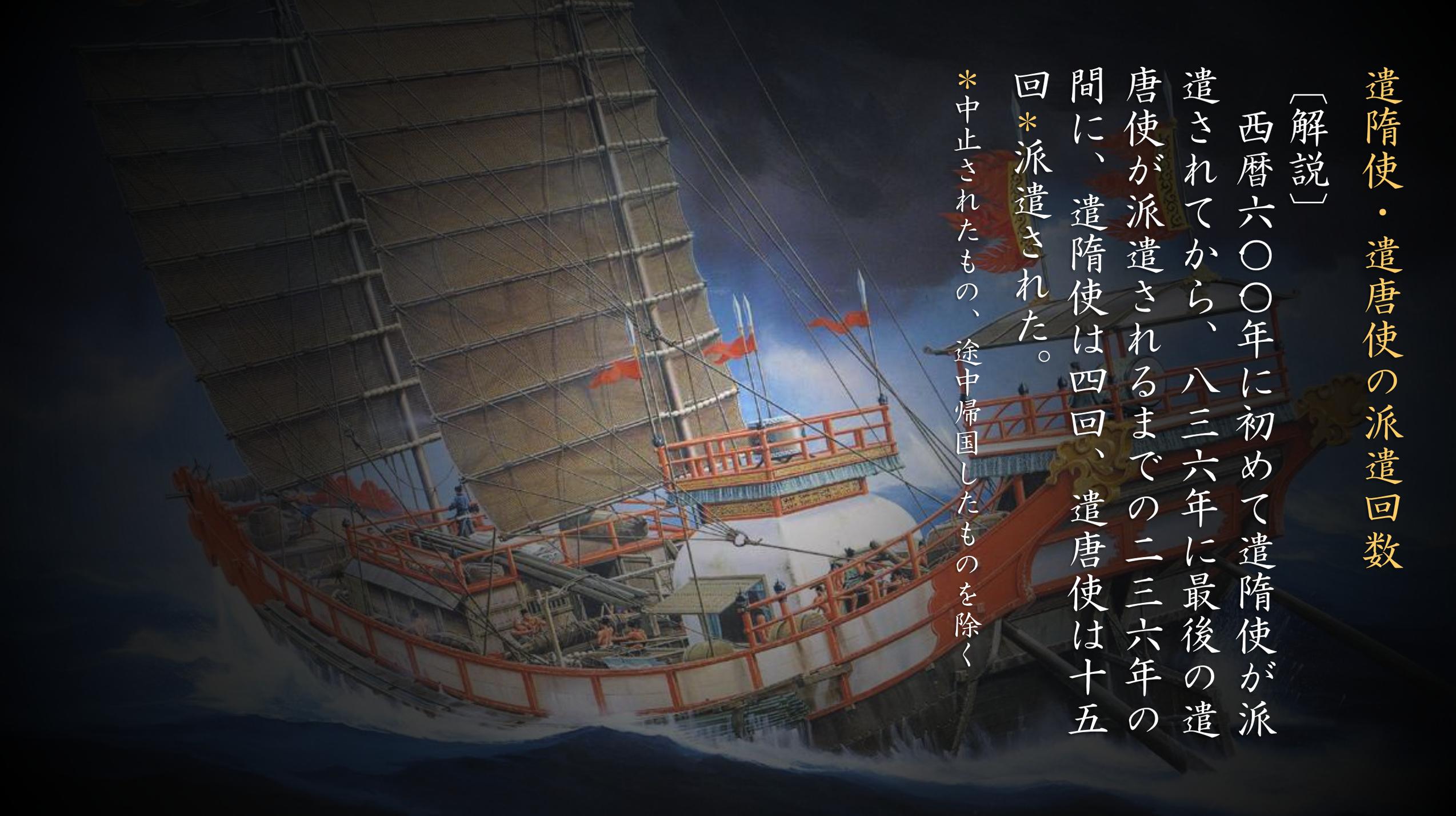


# 遣隋使・遣唐使の派遣回数

〔解説〕

西暦六〇〇年に初めて遣隋使が派遣されてから、八三六年に最後の遣唐使が派遣されるまでの二三六年の間に、遣隋使は四回、遣唐使は十五回\*派遣された。

\*中止されたもの、途中帰国したものを除く



西暦	中国	日本	遣使	備考
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	日本書紀に記録なし
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	小野妹子を派遣
608年	4年	16年	第三回遣隋使	送使 留学生の派遣を開始
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観4年	舒明2年	第一回遣唐使	
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	
667年	乾封2年	6年	途中帰国	送使(百済まで)
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	阿倍仲麻呂、井真成らが唐に留学
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	唐から鑑真上人を招来
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	菅原道真の建議により中止
907年	唐が滅亡			

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞觀4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天寶5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	遣唐使 (第四期 衰退期)
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			



第二節 最初の留学生たち

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

第三次遣隋使(送使)

九月辛巳、隋使・裴世清が任務を終えて帰国することになった。そこで再び小野妹子を大使とし、吉士雄成(きしのおなり)を小使とし、(鞍作)福利を通訳として、隋使の随行として派遣した。

『日本書紀』卷二二推古天皇十六年

置於大門前机止而奏之事畢而退焉是時皇子諸王諸臣悉以金髻華著頭亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅一云服色昔用冠色丙辰饗唐客等於朝九月辛未朔乙亥饗客等於難波大郡宰也唐客裴世清罷歸則復以小野妹子臣為大使吉士雄成為小使福利為通事副于唐客而遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至又憶方解季秋薄冷禽何如想清念此即如常今遣大禮藪因高太禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐國學生倭漢直福因奈羅譯語惠明高向漢人玄理新漢人太國學問僧新漢人日文南淵漢人請安志賀漢人惠隱漢人廣濟等并八人也

隋に派遣された最初の留学生たち

この時、唐国に遣わされし学生は、

倭漢直福因(やまとのあやのあたふくいん)

奈羅訳語恵明(ならのおさえみょう)

高向漢人玄理(たかむくのあやひとくろまる)

新漢人大国(いまきのあやひとおおくに)

学問僧は、

新漢人日文(いまきのあやひとちもん)

南洲漢人請安(みなみぶちのあやひとしょうあん)

志賀漢人恵隱(しがのあやひとえいん)

漢人広濟(あやひとこうさい)

など并せて八人なり。

於朝九月辛未日本書紀卷二二推古天皇十六年  
唐客裴世清罷歸則復以小野妹乎臣為大

使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而

遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇

帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至又憶方解季

秋薄冷禽何如想清念此即如常今遣大禮藪

因高大禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐

國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人

玄理新漢人大國學問僧新漢人日文南洲漢

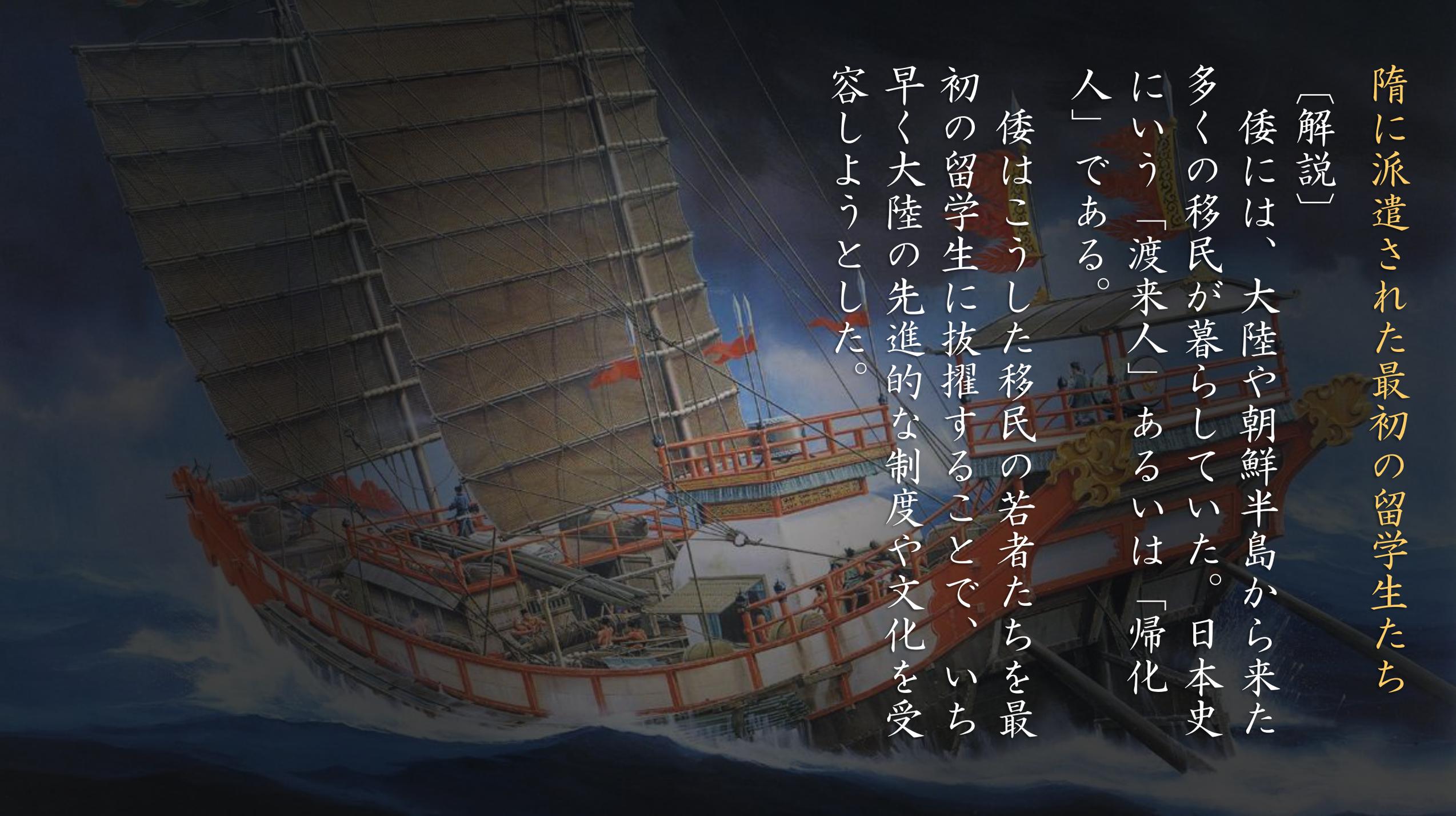
人請安志賀漢人恵隱漢人廣濟等并八人也

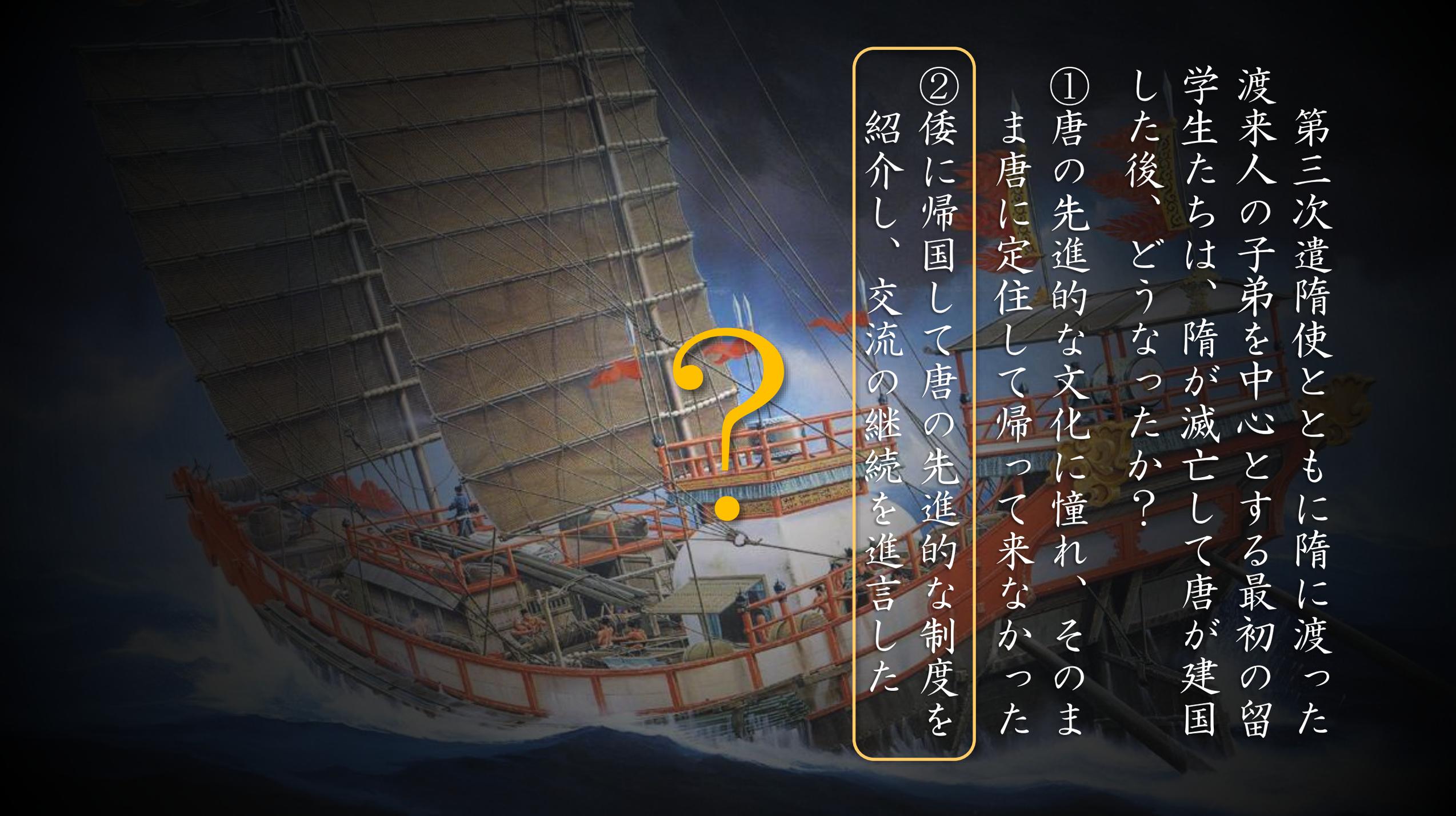
隋に派遣された最初の留学生たち

〔解説〕

倭には、大陸や朝鮮半島から来た多くの移民が暮らしていた。日本史にいう「渡来人」あるいは「帰化人」である。

倭はこうした移民の若者たちを最初の留学生に抜擢することで、いち早く大陸の先進的な制度や文化を受容しようとした。





第三次遣隋使とともに隋に渡った  
渡来人の子弟を中心とする最初の留  
学生たちは、隋が滅亡して唐が建国  
した後、どうなったか？

①唐の先進的な文化に憧れ、そのま  
ま唐に定住して帰って来なかった

②倭に帰国して唐の先進的な制度を  
紹介し、交流の継続を進言した

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(第一期留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因らが新羅大使とともに帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

像居於葛野秦寺以餘舍利金塔觀頂幡等皆  
納于四天王未是時大唐學問者僧惠濟惠光  
及僧惠日福因等並從智洗爾等來之於是惠  
日等共奏聞曰留于唐國學者皆學以成華應  
曠且其大唐國者法式備定珍國也常須遠是  
歲新羅伐任那任那附新羅於是天皇將討新  
羅謀及大臣詢于羣卿田中臣對曰不可急討  
先察狀以知逆後擊之不晚也請試遣使觀其

消息中臣連國曰任那是元我内官家今新羅  
人伐而有之請戒戎旅征伐新羅以取任那附  
歸国した留学生たち

（六二三年、新羅と任那の使節が  
来朝し）唐に留学していた学問僧・  
惠濟、惠光、醫師・惠日、倭漢直福  
因らが（新羅大使）智洗爾らとともに  
帰朝した。

惠日らはともに上奏していった。  
「唐に留学した学生たちは、学業も  
修まったので帰国させるべきでしよ  
う。また唐は法制度の整った優れた  
国なので交流を続けるべきです。」

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が新羅大使とともに帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

大陸の文化を伝えた留学生

舒明天皇十二年(六四〇年)冬十月、唐へ留学していた学問僧・清安(南淵漢人請安)と学生・高向漢人玄理が新羅を通り、百濟、新羅の朝貢使節とともに帰国した。

日本書紀卷二三舒明天皇十二年

已朔壬午幸于伊豫温湯宮是月於百濟川側  
建九重塔五月丁酉朔壬午幸于百濟川側  
十二年春二月戊辰朔甲戌星入月筴四月丁  
卯朔壬午天皇至自伊豫便居鹿坂宮五月丁  
酉朔辛丑大設齋因以請惠隱僧令說无量壽

經冬十月乙丑朔乙亥大唐學問僧清安學生  
高向漢人玄理傳新羅而至之仍百濟新羅朝  
貢之使共從來之則各賜爵一級是月徙於百  
濟宮

十三年冬十月己丑朔丁酉天皇崩于百濟宮  
丙午殯於宮北是謂百濟大殯是時東宮開別  
皇于年十六而誅之

日本書紀卷第二十三

隋に派遣された最初の留学生たち

この時、唐国に遣わされし学生は、

倭漢直福因(やまとのあやのあたふくいん)

奈羅訳語恵明(ならのおさえみょう)

高向漢人玄理(たかむくのあやひとくろまる)

新漢人大国(いまきのあやひとおおくに)

学問僧は、

新漢人日文(いまきのあやひとちもん)

南洲漢人請安(みなみぶちのあやひとしょうあん)

志賀漢人恵隱(しがのあやひとえいん)

漢人広濟(あやひとこうさい)

など并せて八人なり。

於朝九月辛未日本書紀卷二二推古天皇十六年  
唐客裴世清罷歸則復以小野妹乎臣為大

使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而

遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇

帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至又憶方解季

秋薄冷禽何如想清念此即如常今遣大禮藪

因高大禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐

國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人

玄理新漢人大國學問僧新漢人日文南洲漢

人請安志賀漢人恵隱漢人廣濟等并八人也

留学生が、大陸や朝鮮半島の新たな情勢を伝えると、日本国内では外交方針をめぐる大政変が起こる。その政変とは何か？

①乙巳の変(大化の改新)

②壬申の乱





NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第4回 そして日本が生まれた」

中大兄并中臣連見古麻呂等恐入鹿威流行不進吐嗟即率彼等俱拔釵傷  
 割入鹿肩入鹿驚起古麻呂運手揮釵斬其一脚入鹿轉就御座叩頭奏云臣不  
 知罪乞垂審察天皇大驚詔云何事如此耶中大兄伏地奏云執作畫賊天宗將領  
 皇位豈以天孫代執作乎意指敦山背大兄王等也天皇起入大殿手閉殿戶遂以古麻  
 呂等令誅入鹿一說云中臣連以大刀打落入鹿肩次中大兄以釵打落其首不飛高御  
 座戶云一說云入鹿首飛昨付御薦云一說云首飛雷石柱躍揚四十遍一說云入鹿起走  
 中大兄與錄一連目合共立遂斬入鹿流血殺并彼斬卧之冠怒目動身釵一連斬走  
 入鹿首其首躍騰赦度矣于時中臣連年卅一斯時宮中震動皆歌萬歲

豐浦大臣振夷凶賊未平中大  
 兄即入法興寺攝城二鄉大夫悉  
 皆隨焉于時使人賜入鹿屍於  
 大臣蝦夷於是賊黨皆云吾  
 君太昂已被誅戮大臣急立候  
 其誅決矣然則為誰守戰直  
 被刑乎言畢解釵投弓賊悉散

是日雨降潑水  
 庭以席障于掩  
 鹿屍時人以爲  
 天誅逆

多武峰(とうのみね)縁起絵巻 (奈良県櫻井市談山神社蔵)

皇極天皇

中臣鎌足

蘇我入鹿

中大兄皇子

付御簾云云一説云首飛嘯石柱躍揚四  
立遂斬入鹿流血教并彼斬卧之尅怒目  
矣于時中臣連年卅一斯時宮中震動

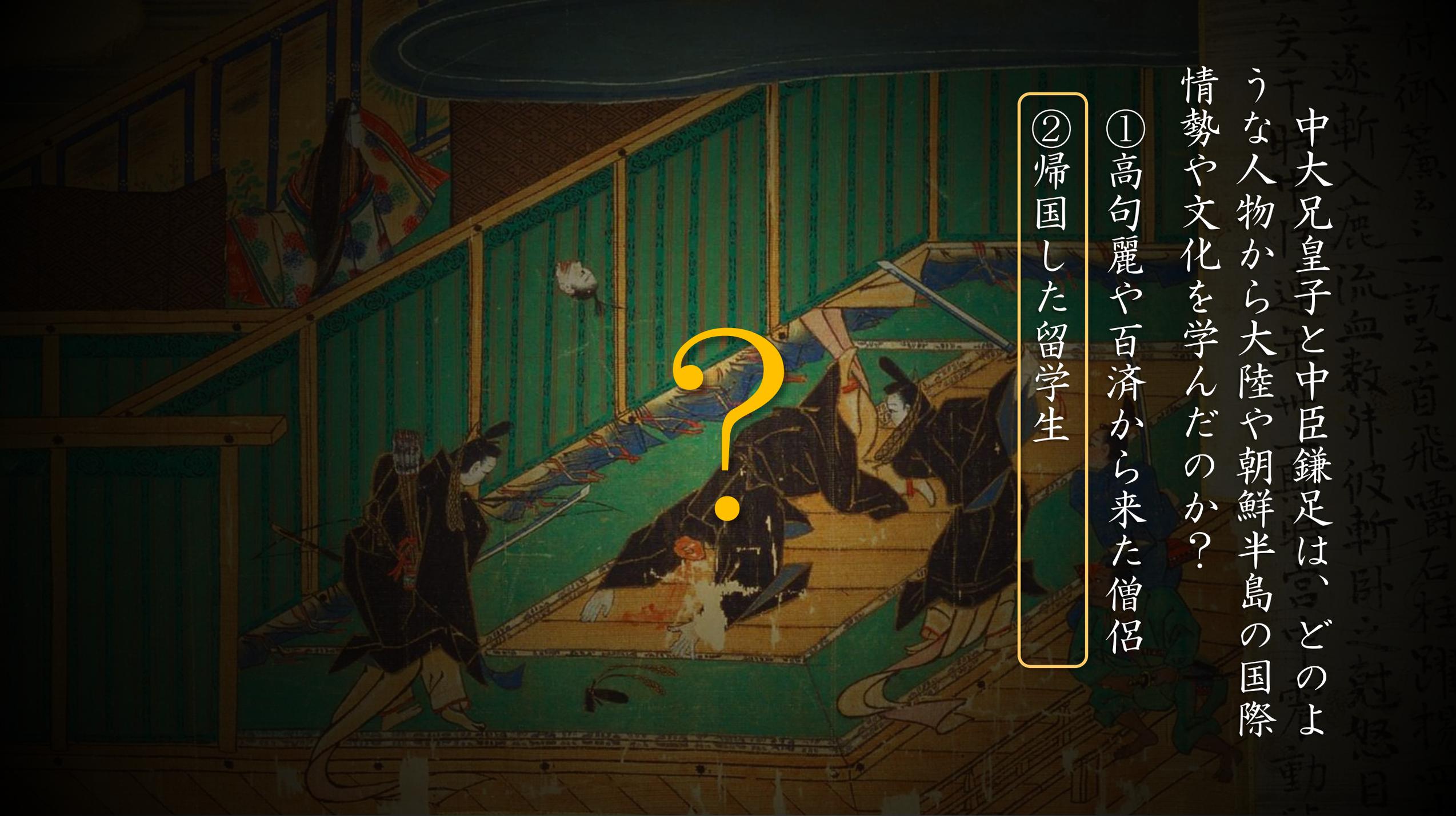
多武峰(とうのみね)縁起絵卷 (奈良県櫻井市談山神社蔵)



中大兄皇子と中臣鎌足は、どのよ  
うな人物から大陸や朝鮮半島の国際  
情勢や文化を学んだのか？

① 高句麗や百済から来た僧侶

② 帰国した留学生



跪恭奉中大兄對跪敬執自茲相善俱迷  
所懷既無可遁復恐他嫌頻接而俱手把  
黃卷自學周孔之教於南淵先生所遂於  
路上往還之間並肩潛圖無不相協於是中  
臣鎌子建議曰謀大事者不如輔請  
納蘇我山倉田麻呂長女為妃而成婚姻  
之昵然後陳說款與計事成功之路莫近  
於茲中大兄聞而大悅曲從所議中臣鎌

子連即自往謀要訖而長女所期之夜被  
偷於族族謂躬也由是倉山田臣憂惶仰臥  
不知可為少惟父憂惶就而問曰憂何

### 大陸の文化を伝えた留学生

(中大兄皇子と中臣鎌足は) ともに  
書物を携え、南淵(請安)先生のとこ  
ろで周・孔の教え①を学んだ。

〔注釈〕

①周・孔とは、周公と孔子。周・孔の教えとは、  
漢代以降、中国の国教となった儒教を指す。

『日本書紀』卷二四 皇極天皇三年

團傳三

事之云々以沙門是法師高向史玄理為國博

士幸矣以金策賜阿倍倉梯麻呂大臣与籙我

山田石川麻呂大臣或本云卯天皇此弟也祖母

天皇下盟

尊皇太子於大槻樹之下召集群臣盟曰吉天

祇曰天覆地載帝道唯一而未代流薄君臣失

序皇天假神於我誅殄暴逆今共懸心而自今

以後君無二政臣無貳朝君戴此盟改天豐財

大化元年

重日足姬天皇四年為大化元年此元年也

音

額天皇女間人皇女為皇后立二妃阿倍倉梯

麻呂大臣女曰小足媛生有間皇子次妃籙我

山田石川麻呂大臣女曰乳娘丙子高麗百濟

三韓並

遣使進調百濟調進兼領任那使任那

### 大陸の文化を伝えた留学生

(皇極天皇の四年) 沙門是、法師高

向史玄理を国の博士とした。

『日本書紀』卷二四 皇極天皇四年

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める



松島 幸太朗  
南アフリカ出身



マイケル・リーチ  
ニュージーランド出身



田村 優  
日本出身(予選の最高得点者)



### 第三節 白村江の戦いと遣唐使

白村江の戦い  
663年

六四五年、乙巳の変によって百済一辺倒の外交政策をとっていた蘇我氏を退け、自主独立の平和外交に回帰した倭であったが、唐が新羅との関係を深め、朝鮮半島の問題に介入するようになる。唐に対する警戒を高めていく。

六六〇年、唐が新羅と連合して百済を滅ぼすと、倭はその外交政策を一転し、百済復興運動を支援するため、六六三年、朝鮮半島に出兵する。日本古代史上最大の海外派兵となった白村江の戦いである。

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			



NHKE

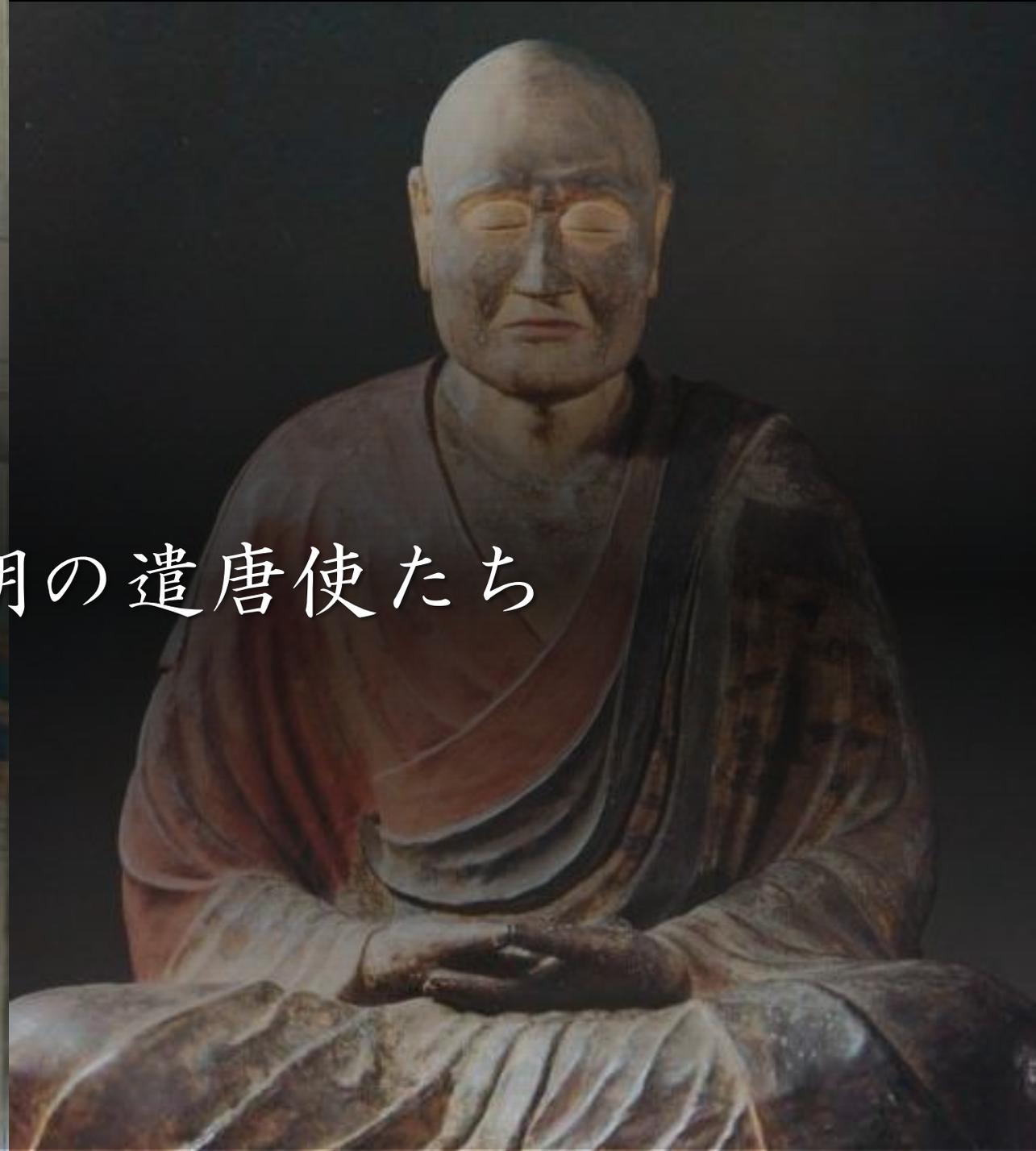


NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第4回 そして日本が生まれた」

西暦	中国	日本	使節	備考
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			



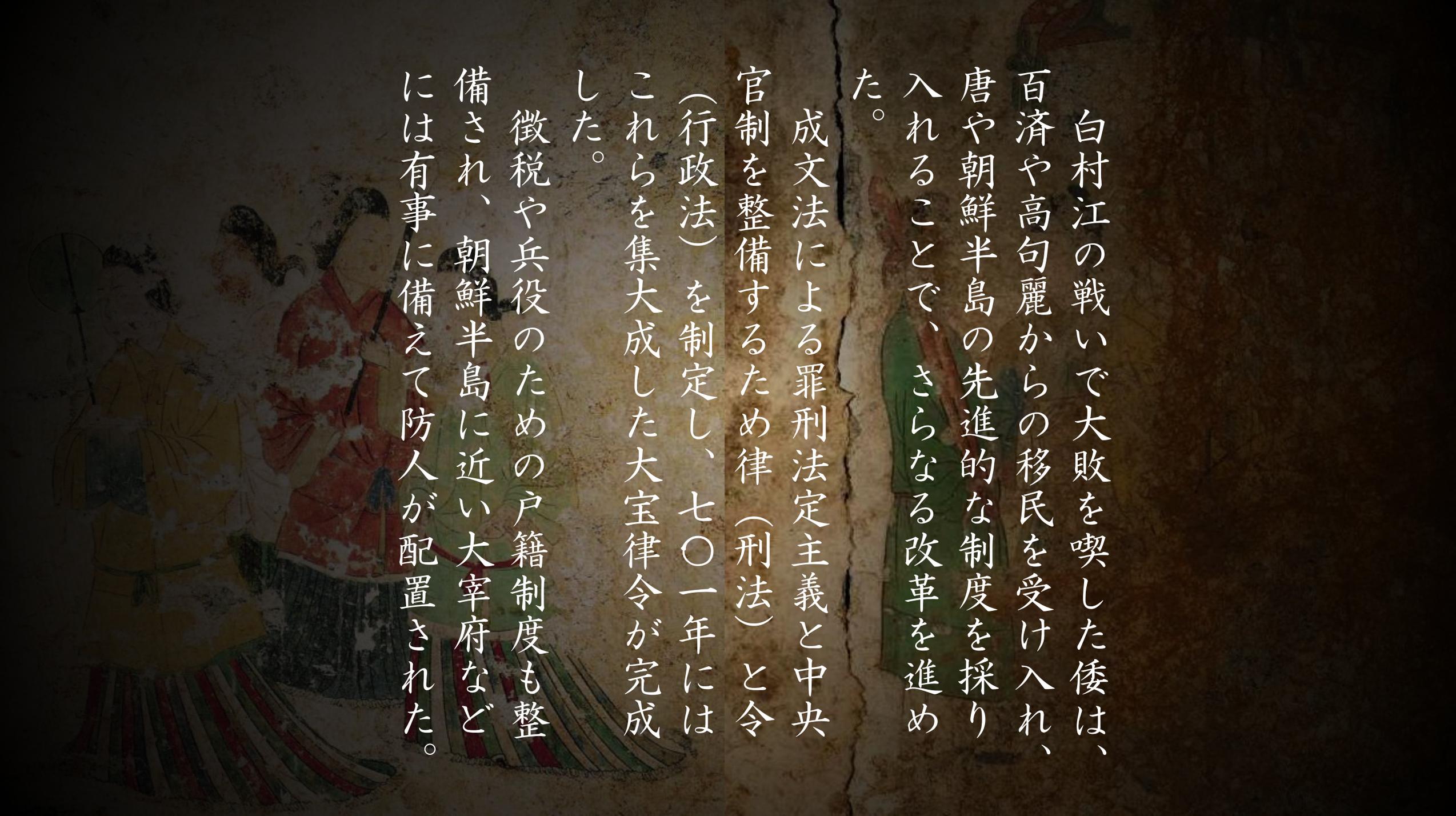
## 第四節 最盛期の遣唐使たち



白村江の戦いで大敗を喫した倭は、百済や高句麗からの移民を受け入れ、唐や朝鮮半島の先進的な制度を採り入れることで、さらなる改革を進めた。

成文法による罪刑法定主義と中央官制を整備するため律（刑法）と令（行政法）を制定し、七〇一年にはこれらを集大成した大宝律令が完成した。

徴税や兵役のための戸籍制度も整備され、朝鮮半島に近い大宰府などには有事に備えて防人が配置された。



西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞觀4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断				
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	7年	中止	
733年	21年	7年	中止	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

**701年 大宝律令(法に基づく諸制度の整備)**



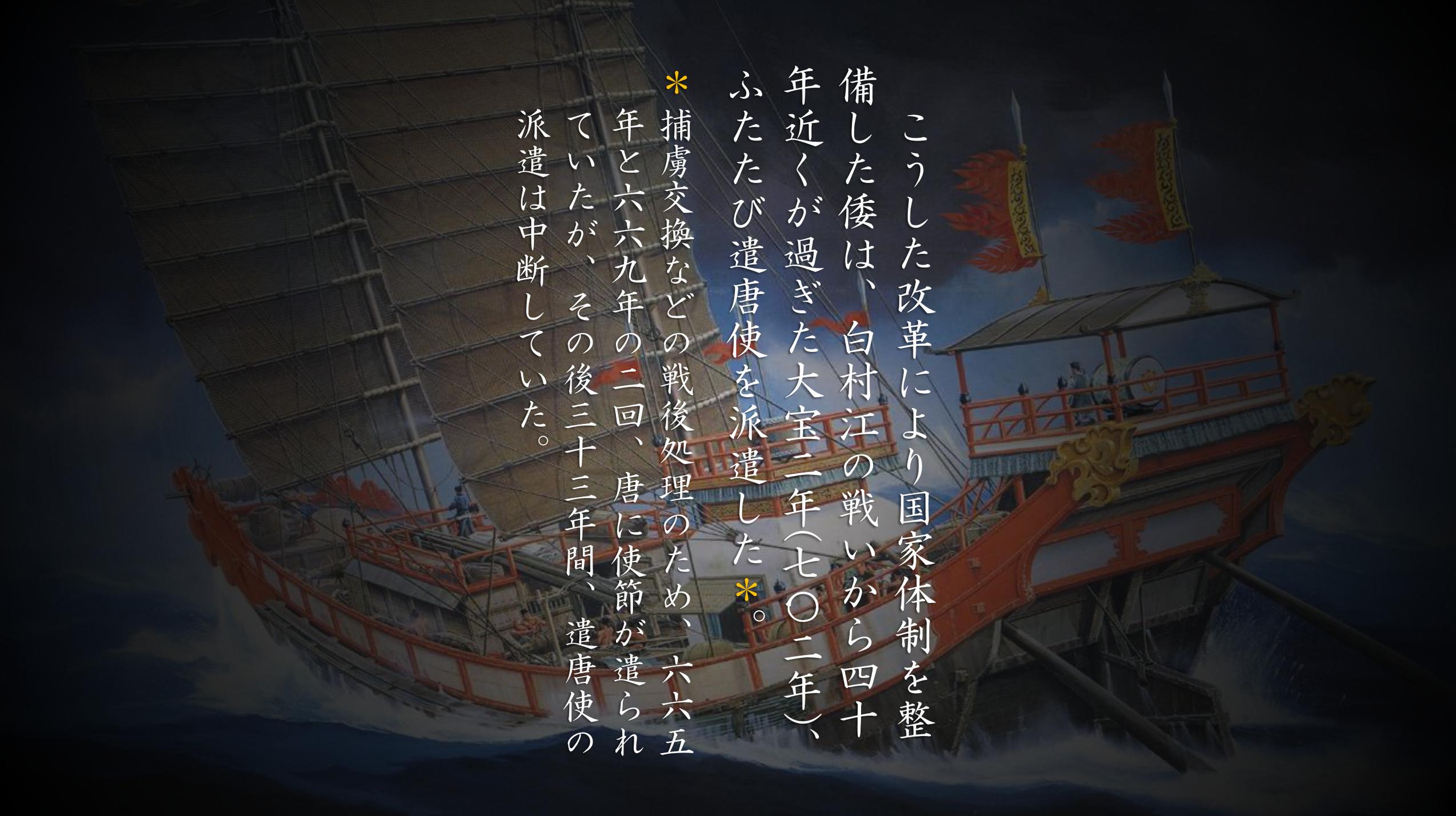


太宰府



大野城跡：水城構築の翌年(665)、百濟亡命貴族の指揮下で造られた朝鮮式山城

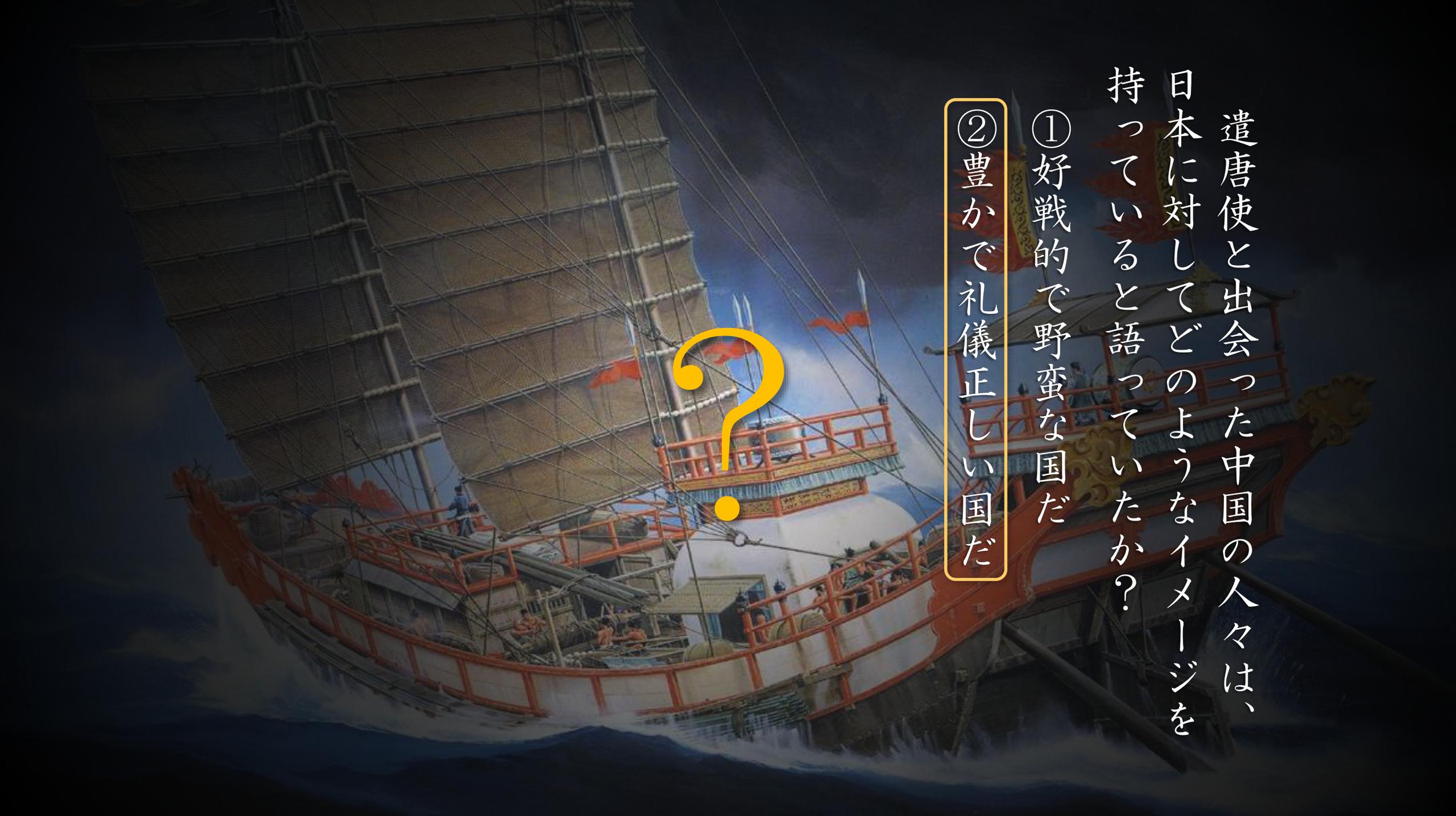
水城跡：白村江の戦いの翌年(天智3年(664))に大宰府防衛のために構築された土塁。全長約1.2km、幅80m、高さ13m、博多側には幅60mの濠があった。



こうした改革により国家体制を整備した倭は、白村江の戦いから四十年近くが過ぎた大宝二年（七〇二年）、ふたたび遣唐使を派遣した\*。

\* 捕虜交換などの戦後処理のため、六六五年と六六九年の二回、唐に使節が遣られていたが、その後三十三年間、遣唐使の派遣は中断していた。

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			



遣唐使と出会った中国の人々は、  
日本に対してどのようなイメージを  
持っているかと語っていたか？

① 好戦的で野蛮な国だ

② 豊かで礼儀正しい国だ

皇白朝  
臣自唐  
歸  
天  
武  
元  
年

之年限考第一准竹任之例○  
市郡人高屋連藥女一産二男賜絶二疋綿二  
屯布四端○己巳阿波國獻木連理○丙子奉  
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟  
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰  
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何  
州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是  
大周今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

天  
武  
元  
年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号  
大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有  
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使  
人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京  
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降  
遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省大

皇言曰長安六年  
真王文并立既元曰  
大周遣朝臣真人  
栗田朝臣真人  
人者物言當書也  
寄進使寄物言  
事真人行字外  
又進正字言

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

〔解説〕

白村江の戦いから四十年近くが過  
ぎた大宝二(七〇二)年、栗田朝臣真人

(あわたのあそんまひと)を長官として第七回  
遣唐使が派遣された。

それから二年後、帰国した栗田真  
人は唐に到着した時のようすを次の  
ように報告している。

之年限考第一准竹任之例○己巳河内國古市郡人高屋連藥女一産二男賜絶二足綿二屯布四端己巳阿波國獻木連理○丙子奉幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是大唐今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省大

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

唐に着いたばかりのころ、ある人が尋ねた。

「どこの国の使節の方ですか」

「日本国の使節です」

我々の使節が

「ここは何というところですか」

と尋ね返すと

「周の楚州塩城縣です」と答えた。

後漢 25-220

魏 220-265 | 蜀 221-263 | 吳 222-280

晋 265-316

五胡十六国時代 | 東晋 317-420

北朝 439-589 | 南朝 420-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼 | 北宋 960-1127

金 1115-1234 | 南宋 1127-1279

元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民國 1912-1949  
中華人民共和國 1949-



楚州塩城県

倭が第七回遣唐使を派遣する(702年)

之年限考第一准竹任之例○己巳河内國古  
市郡人高屋連藥女一産三王男賜絶二足綿二  
屯布四端己巳阿波國獻木連理○丙子奉  
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟  
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰  
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何  
州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是  
大周今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

皇白朝  
臣自唐  
歸

天  
高宗  
永淳  
二年

天  
高宗  
永淳  
二年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号  
大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有  
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使  
人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京  
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降  
遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省大

公唐書曰長安六年  
真王文丹立為元日  
大周遣朝臣使人  
來問唐者何物  
人者何物唐書也  
答曰唐書也  
又唐書曰長安六年

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

「以前は唐と称していたのに、なぜ  
周と国名を変えたのですか」  
と尋ねると、

「永淳二年(六八三年)に高宗が崩  
御されると、則天武后が即位して聖  
神皇帝と称され、国名を周と改めた  
のです」  
と答えた。

之年限考第一准竹任之例○己巳河内國古  
市郡人高屋連藥女一産王男賜絶二足綿二  
屯布四端己巳阿波國獻木連理○丙子奉  
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟  
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰  
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何  
州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是  
大唐今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

唐書曰長安六年  
自王文升立為元曰  
大周遣朝臣使人  
人者物書也  
晉書曰長安六年  
自王文升立為元曰  
大周遣朝臣使人  
人者物書也

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号  
大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有六  
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使  
人儀容大淨豈不信乎語畢而去丙戌左京  
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降  
遣使祈雨於諸社○庚子公廡祿給式部省大

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

問答がほぼ終わると、唐の人は  
我々の使節にこういった。

「海の東にある倭という国は君子の  
国で、人々は豊かで礼義正しいとよ  
く聞いていました。いま使節の方々  
の立派な様子を見て、それが本当だ  
とわかりました」

そう言い終わると去って行った。

栗田真人が報告した当時の中国の  
人々の対日イメージは真実か？

① 真実

② だいぶ盛ってる



唐の人々の対日イメージ(中国側記録)

長安三年(七〇三年)、日本国の大

臣・朝臣真人(粟田真人)が朝貢に来た。

朝臣真人というのは、中国の戸部

尚書のような官職で、進徳冠をかぶ

り、その頂を花模様にし、四方に分

けていた。紫の袍を身につけ、絹を

腰帯にしていた。

八十左右各數枚以明『旧唐書』卷一四九東夷伝日本國  
使獻方物太宗矜其道遠勅所司無令歲貢又遣新州刺史高表仁  
持節往撫之表仁無綏遠之才與王子爭禮不宣朝命而還至二十  
二年又附新羅奉表以通起居

日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本為名或曰倭國  
自惡其名不雅改為日本或云日本舊小國併倭國之地其人入朝  
者多自矜大不以實對故中國疑焉又云其國界東西南北各數千  
里西界南界咸至大海東界北界有大山為限山外即毛人之國長  
安三年其大臣朝臣真人來貢方物朝臣真人者猶中國戸部尚書

冠進徳冠其頂為花分而四散身服紫袍以帛為腰帶真人好讀經  
史解屬文容止温雅則天宴之於麟徳殿授司膳卿放還下國開元  
初又遣使來朝因請儒士授經詔四門助教趙玄默就鴻臚寺教之  
乃遣玄默闊幅布以為束修之禮題云白龜元年調布人亦疑其偽  
此題所得錫賚蓋市文籍泛海而還其偏使朝臣仲滿慕中國之風

因留不去改姓名為朝衡仕歷左補闕儀王友衡留京師五十年好  
書籍放歸鄉逗留不去天寶十二年又遣使貢上元中擢衡為左散  
騎常侍鎮南都護貞元二十年遣使來朝留學生摘免勢學問僧空  
海元和元年日本國使判官高階真人上言前件學生藝業稍成願  
歸本國使請與臣同歸從之開成四年又遣使朝貢

唐の人々の対日イメージ(中国側記録)

真人は経史を読むのを好み、文章を書くことができ、容貌や身のこなしも優雅であった。

則天武后は麟徳殿で宴を開き、司膳卿の位を授けて、本国に帰還させた。

『旧唐書』卷一四九東夷伝日本國

八十左右各數枚以明貴賤等絁衣服之制胡類新羅百觀五年遣使獻方物太宗矜其道遠勅所司無令歲貢又遣新州刺史高表仁持節往撫之表仁無綏遠之才與王子爭禮不宣朝命而還至二十二年又附新羅奉表以通起居

日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本為名或曰倭國自惡其名不雅改為日本或云日本舊小國併倭國之地其人入朝者多自矜大不以實對故中國疑焉又云其國界東西南北各數千里西界南界咸至大海東界北界有大山為限山外即毛人之國長安三年其大臣朝臣真人來貢方物朝臣真人者猶中國戶部尚書冠進德冠其項為花分而四散身服紫袍以帛為腰帶真人好讀經史解屬文容止溫雅則天宴之於麟徳殿授司膳卿放還下國開元初又遣使來朝因請儒士授經詔四門助教趙玄默就鴻臚寺教之乃遣玄默闊幅布以為束修之禮題云白龜元年調布人亦疑其偽此題所得錫賚蓋市文籍泛海而還其偏使朝臣仲滿慕中國之風

因留不去改姓名為朝衡仕歷左補闕儀王友衡留京師五十年好書籍放歸鄉逗留不去天寶十二年又遣使貢上元中擢衡為左散騎常侍鎮南都護貞元二十年遣使來朝留學生摘免勢學問僧空海元和元年日本國使判官高階真人上言前件學生藝業稍成願歸本國使請與臣同歸從之開成四年又遣使朝貢

遣唐使として派遣された留学生の中には、学業優秀で唐の役人に取り立てられる者もいた。  
七十七年、第八回遣唐使の一員として唐に留学したある留学生は、科挙(官吏登用試験)に合格し、唐の官僚となつて玄宗皇帝に重用されている。  
それは誰か？

①阿倍仲麻呂

②菅原道真



西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

# 阿倍仲麻呂（六九八〜七七〇）

## 〔解説〕

七一六年、十九歳で遣唐留学生に選ばれ、翌年、第八回遣唐使に従って唐に渡る。

唐の太学に学び、科挙に合格して唐の官吏となった。

中国名を朝衡（晁衡）と名乗り、王維や李白らとも親交があった。

七五二年、第十回遣唐使とともに帰国を図るが、船がベトナムに漂着。帰国を果たせぬまま、七十三歳で長安に没した。



天の原  
振りさけ見れば春日なる  
三笠の山に出でし月かも

阿倍仲麻呂  
國書

## 遣唐使・井真成の墓誌蓋と墓誌石

### 〔解説〕

遣唐使とともに入唐した留学生の中には、現地で亡くなる者もいた。

唐がそうした留学生たちを手厚く葬っていたことがわかる遺物が、二〇〇四年、唐の都であった西安で発見された。

阿倍仲麻呂とともに第八回遣唐使の一員として唐に渡り、現地で亡くなった井真成という留学生の墓誌石である。

贈 肅 君 墓 誌 銘  
肅 君 墓 誌 銘

井真成墓誌蓋拓本

贈尚衣  
奉御  
府君  
真成墓誌

贈尚衣  
奉御  
府君  
真成墓誌

井真成墓誌蓋拓本

井真成墓誌拓本

拓本はどのようなようにして作るか？

① 石碑に紙を貼り、上から墨をつける

② 石碑に墨を塗り、その上に紙を貼って写す

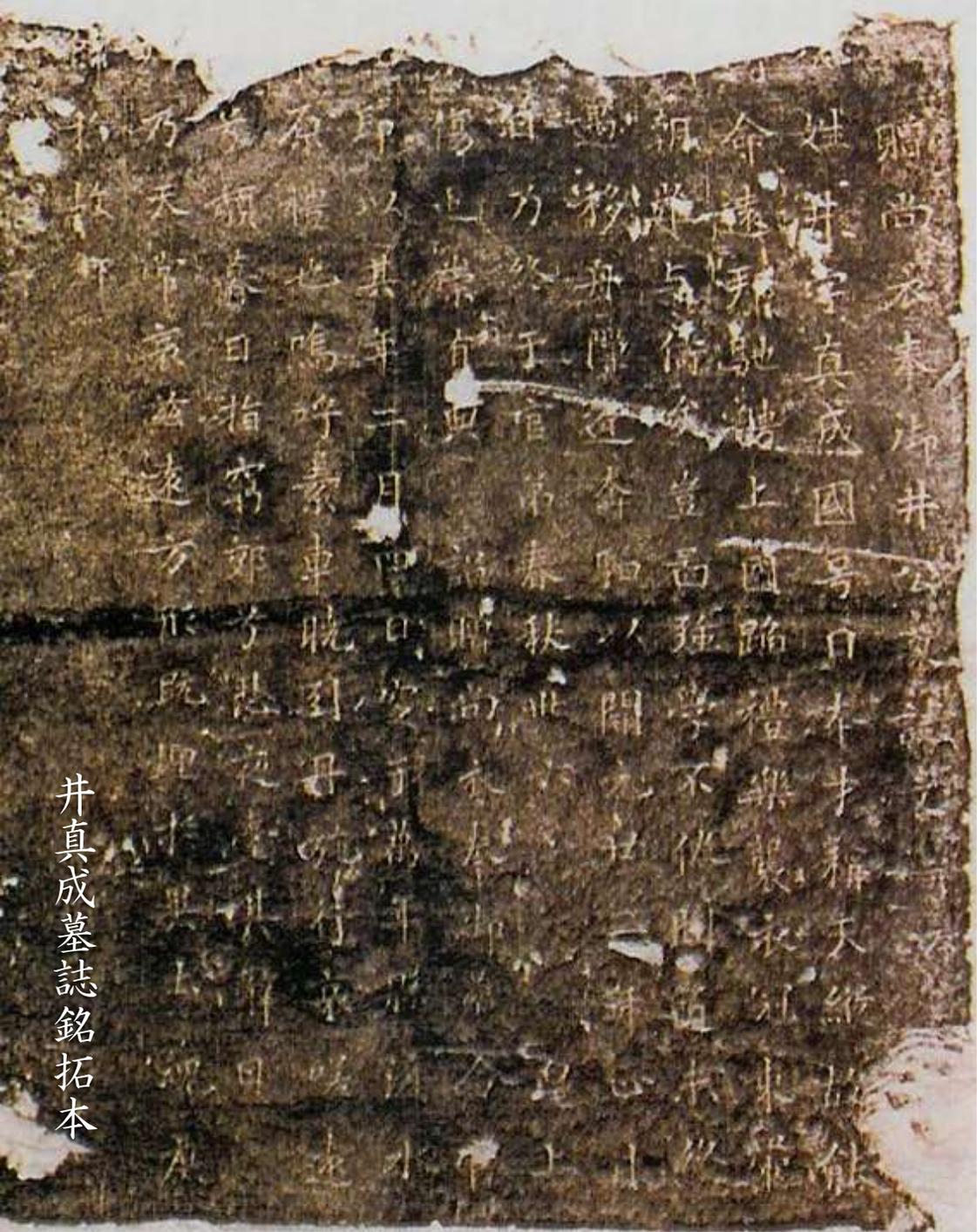




遣唐使・井真成の墓誌銘

贈尚衣奉御井公墓誌文並序  
公姓井字真成國号日本才稱天縱故能  
銜命遠邦馳騁上國蹈禮樂襲衣冠束帶  
升朝難與儔矣豈圖強學不倦聞道未終  
壑遇移舟隙逢奔駟以開元廿二年正月  
十日乃終於官弟春秋卅六 皇上  
悼傷追崇有典 詔贈尚衣奉御葬令官  
給即以其年二月四日窆於萬年縣漉水  
東原禮也嗚呼素車曉引丹旆行衰嗟遠  
路兮頽暮日指窮郊兮悲夜臺其辭曰  
憾乃天常哀茲遠方形既埋於異土魂庶  
歸於故鄉

井真成墓誌銘 (灰色字は氣賀澤保規博士の推定)

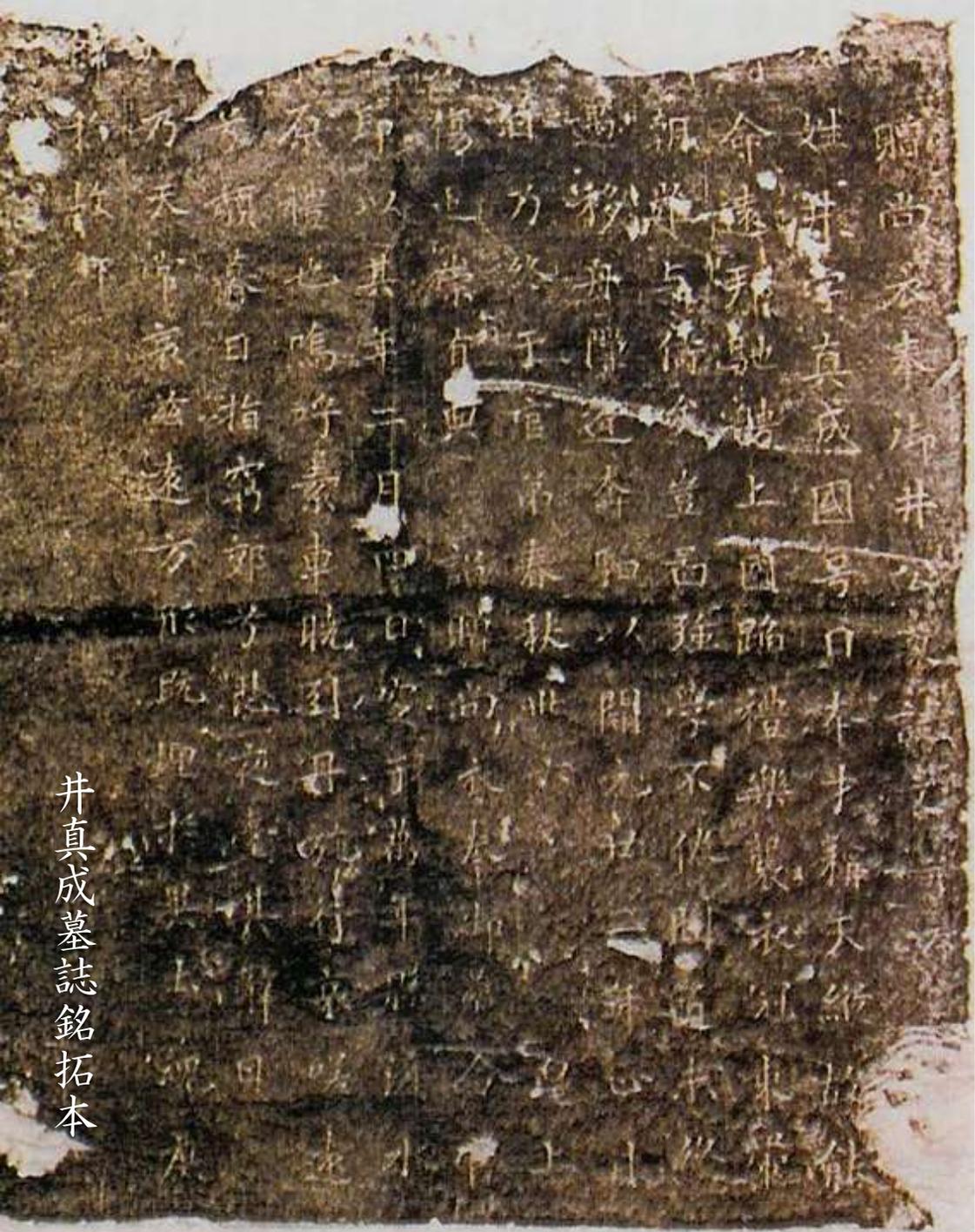


井真成墓誌銘拓本

遣唐使・井真成の墓誌銘

公、姓は井、字は真成。国号は日本。卓越した才能により遠国から命を受け、我が国に來た。礼をわきま  
え、身なりも正しく、朝廷に昇れば  
並ぶ者もないほどだった。

開元二二年（七三四年）正月十日、  
官舎で三六年の生涯を閉じた。玄宗  
皇帝陛下はその死を悼まれ、尚衣奉  
御の官位を追贈して葬儀を行わせ、  
同年二月四日に万年県漚水の東原に  
埋葬した。



井真成墓誌銘拓本

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞觀4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封2年	6年	途中帰国	
669年	総章2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

## 唐の玄宗皇帝から贈られた国号

遣唐使や留学生たちの礼儀正しく優秀なふるまいは、唐王朝の日本に對する評価をも高めることになる。

来日した中国の僧・思託が、延暦七年（七八八年）に著した『延暦僧録』には、唐の玄宗皇帝が日本に「有義礼儀君子国」という国号を与えたことが記されている。



旬北方黃金山出海上高廿五由旬此四寶山谷棧從  
金剛地水輪際出且十六万八千由旬地藏菩薩化  
北方金山神施金透陸與國供聖武菩薩金銅盪舍  
那佛用仍差少僧都良辨及佐伯宿禰令毛人命造  
寺別當又造等身銀像一軀又發使入唐使至長安  
不拂塵唐至開元天地大寶聖武應道皇帝云彼國  
有賢主君觀其使臣趨揖有異即加号日本為有義  
禮儀君子之國復元日拜朝賀正勅命日本使可於  
新羅使之上又勅命朝衡領日本使於府庫一切悉  
遍宥至彼披三教殿初礼君主教殿御座如常莊飾

東大寺要錄所引延曆僧錄

凡經三史架列積載厨龕次至御披老君之教堂閣  
少高顯御座莊嚴少勝厨列龕函盈滿四子太玄後  
至御披釋典殿宇顯教嚴麗殊絕龕函皆以雜宝厨  
填檀沈異香莊校御座高廣倍勝於前以雜寶而為  
燭毫下有巨螯戴以蓬萊一上列仙宮靈宇戴宝  
樹地其紅牌寶莊飾華中一華中各有一  
唐の玄宗皇帝から贈られた国号

李白圖卷」招飲

(七五二年)再び唐へ使節第十回及遣唐使)を送った。一行は長安に到着すると、旅の疲れもそのままに宮中に参内した。

延曆僧錄 勝宝感神聖武皇帝菩薩伝

旬北方黃金山出海上高廿五由旬此四寶山谷棧從  
金剛地水輪際出以十六万八千由旬地藏菩薩化  
北方金山神施金透陸與國供聖武菩薩金銅盪舍  
那佛用仍差少僧都良辨及佐伯宿禰令毛人命造  
寺別當又造等身銀像一軀又發使入唐使至長安  
不拂塵唐至開元天地大寶聖武應道皇帝云彼國  
有賢主君觀其使臣趨揖有異即加号日本為有義  
禮儀君子之國復元日拜朝賀正初命日本使可於  
新羅使之上又勅命朝衡領日本使於府庫一切悉  
遍宥至彼披三教殿初礼君主教殿御座如常莊飾

東大寺要録所引延曆僧録

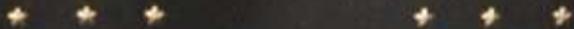
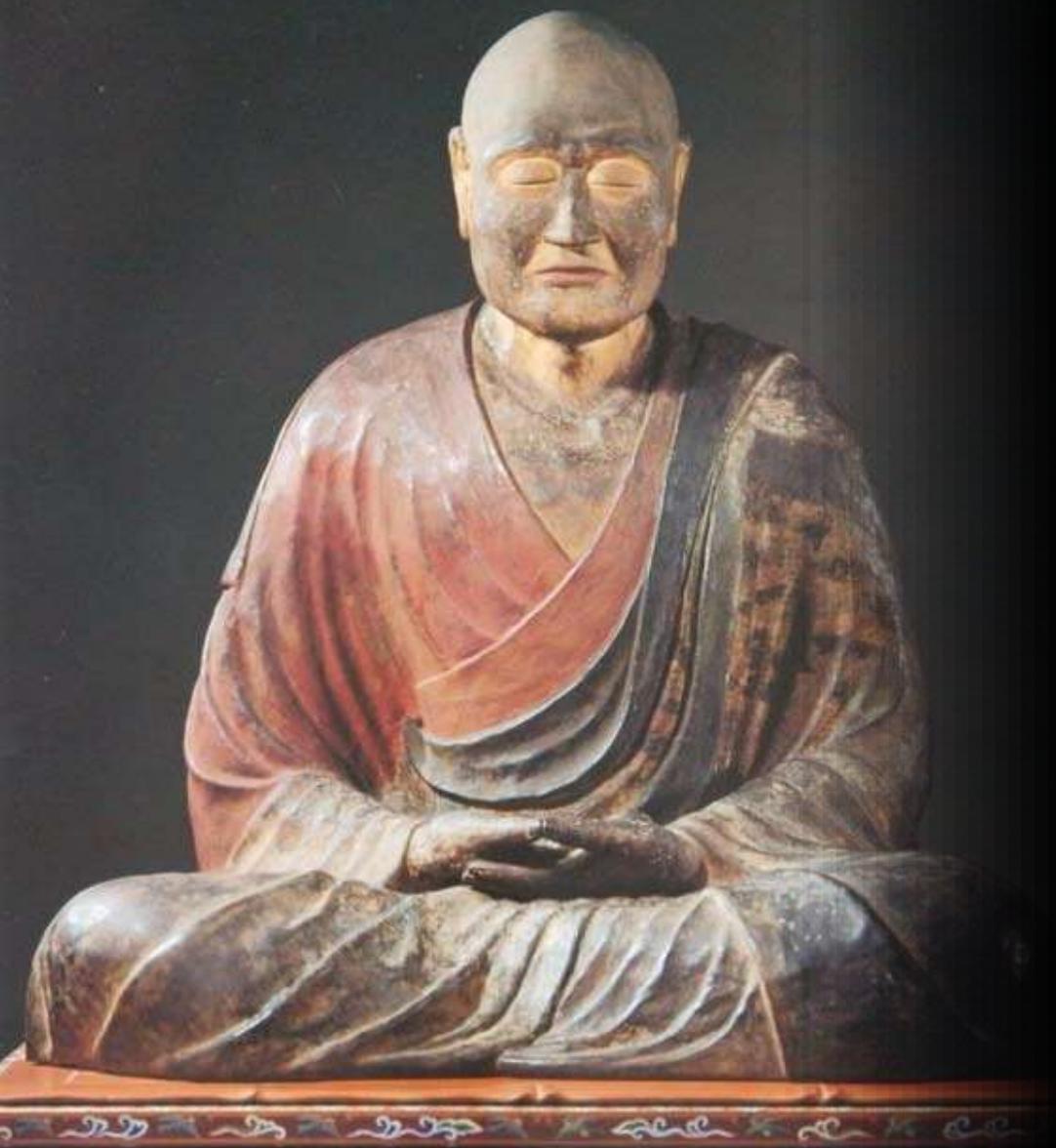
凡經三史架列積載厨龕次至御披老君之教堂閣  
少高顯御座莊嚴少勝厨列龕函盈滿四子太玄後  
至御披釋典殿宇頭教嚴麗殊絕龕函皆以雜宝厨  
真檀沈香柱校御座高廣倍於前以雜寶而為  
唐の玄宗皇帝から贈られた国号雜寶而為  
燭臺下有巨螯戴以蓬萊一上列仙宮靈宇戴宝  
唐の玄宗皇帝は「かの国に優れた  
君主がいることは、その使臣の振る  
舞いが並々でないことを見ればわか  
る」といい、日本に「有義礼儀君子  
国」という国号を与えた。さらに元  
日の朝賀の際は、日本の使節の序列  
を新羅の上位に据えるよう命じた。

延曆僧録 勝宝感神聖武皇帝菩薩伝

遣唐使は、唐の優れた人材も日本に招来した。右の像は、第十回遣唐使が招来した唐の高僧である。この高僧とは誰か？

① 玄奘

② 鑑真

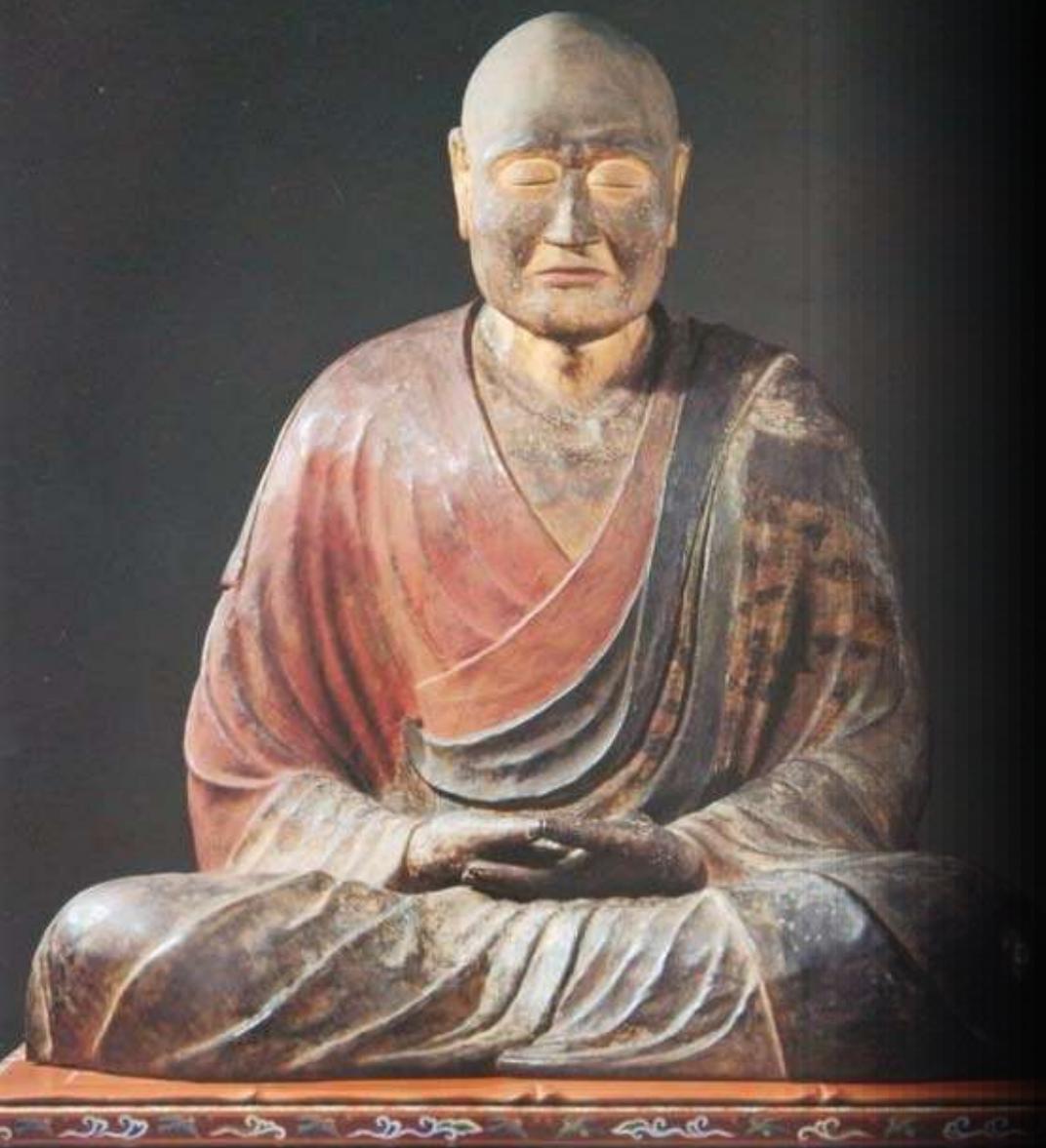


## 鑑真(六八八〜七六三)

### 〔解説〕

唐の高僧。揚州江陽県の生れ。

当時、日本では官許を得ぬまま出家する私度僧が増えていた。朝廷は僧尼の受戒制度を整えるために、第九回遣唐使の際に僧・栄叡(ようえい)を同行させ、揚州大明寺の鑑真に日本への渡航を要請した。



鑑真像(唐招提寺)

## 鑑真(六八八〜七六三)

### 〔解説〕

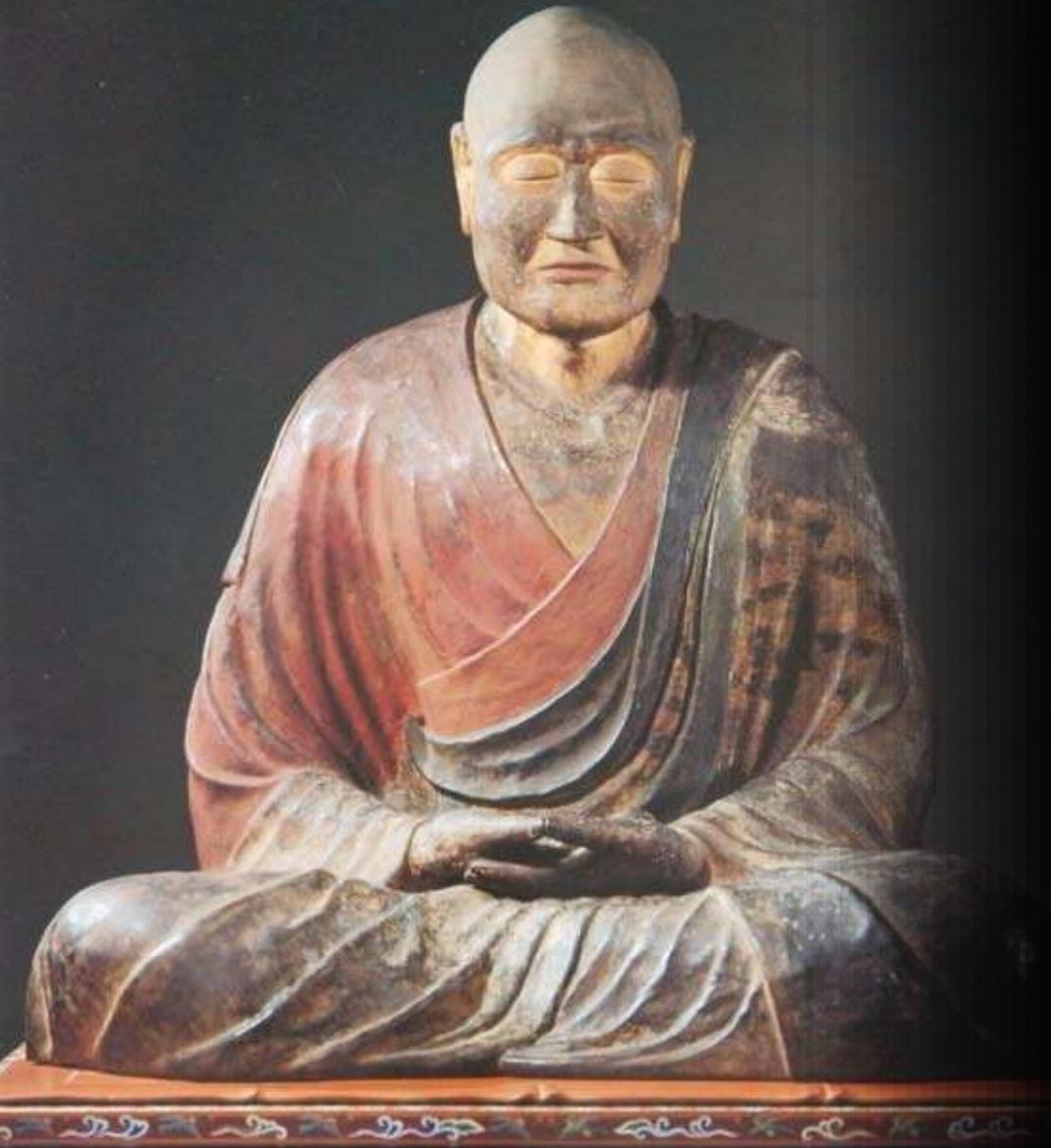
鑑真は日本の要請に応じ、五回に渡って渡航を企てたが、いずれも失敗し、視力を失った。七五二年、六度目の渡航でようやく日本に渡った。鑑真は、僧尼の受戒制度を整備するとともに、唐招提寺を建てて日本の律宗の開祖となった。

鑑真の墓(唐招提寺)

遣唐使には、使節や留学生ばかりでなく、唐の先進的な技術を学ぶ技術者も含まれていた。左の鑑真像も当時の最新技術で作られたものである。材料には何が使われているか？

① 樹脂

② 木材



鑑真像(唐招提寺)



鑑真像(唐招提寺)

鑑真が来日した当時、日本では東大寺大仏建立による銅不足が生じていた。このため鑑真像や興福寺の阿修羅像など当時制作された仏像の多くは、唐から伝えられた「乾漆造」という技法で作られている。



阿修羅像(興福寺)

## まとめ

西暦六〇〇年から八三六年までの二三六年の間に、遣隋使は四回、遣唐使は十五回派遣された。

その間、唐・新羅連合軍との戦争によって一時中断はあったものの、唐から帰国した留学生や百済や高句麗からの渡来人を通じて唐や朝鮮半島の先進的な制度や文化を取り入れた倭は、遣使や留学生たちの礼儀正しい態度とも相俟って唐王朝からも「君子の国」と称えられるようになった。

## 参考文献

- 東野治之『遣唐使』（岩波新書二〇〇七年）
- 上田雄『遣唐使全航海』（草思社二〇〇六年）
- 専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』（朝日選書二〇〇五年）
- 王勇『唐から見た遣唐使』（講談社新書メチエ一九九八年）

## 映像資料

- ETV特集「日本と朝鮮半島二〇〇〇年第四集そして日本が生まれた」（NHK教育二〇〇九年七月二六日放送）